

第三章 削りかけに用いる樹種とその選択

削りかけに用いられる素材として特定の樹木が選ばれる傾向にあることは、従来の研究においても認識されてきた。辞典類からいくつか引いてみる。

「ヌルデ、ニワトコ、ミズキ、柳などの軟らかな木が使用される」

〔栃原 一九九九 五六八〕

「土地によって差があるが、最も広く用いられるものはヌルデ・ニワトコ・胡桃・柳・松など」〔民俗学研究所編 一九五三 七二〕

「ヌルデ・ニワトコ・ミズキ・柳など、やわらかい木の枝」

〔大間知ほか 一九七二 二四一〕

「ヌルデ・ニワトコ・クルミ・ミズブサ・柳・松・檜などの木」〔西角井 一九五八 二八六〕

筆頭に挙げられているのはウルシ科のヌルデである。次いでスイカズラ科ニワトコが挙げられ、ヤナギ類やミズキ科ミズキ、クルミ類も常連である。本章で確認していくように、ここに挙げられた樹種相は確かに削りかけ材の実態に沿っている。しかし、こうした記述は目前の事実を拾っているにすぎず、そこには、その樹木を主体的に選んでいる人間がいるという背景が映されておらず、また樹種選択の具体的様相についても示されてはいない。たとえば、これらは削りかけの造形や用途、名称などに関わらず選ばれているのだろうか。また、どの地域においてもこれらの木が選ばれているのだろうか。そしてなぜ、これらの木が数ある樹木の中から選ばれるのだろうか。

こうした問いを提示した上で、本章では、ある習俗的なまとまりを持つ地域内で、どのような造形、名称、用途を持つ削りかけに、どの樹種が選ばれているのかを検討していきたい。削りかけの造形・用途・名称、そして選択される樹種は、ある特定の地域内においてはその全て、あるいは一部が明らかに互いに関連しており、その全体を考慮に入れなければどの樹木がどの用途に用いられる傾向にあるかは判然としない。しかもそうした結びつきは有機的であり、地域によっても異なってくる。そこで第一節・二節では、列島のなかでも最も分布密度が高く、報告事例も豊富な群馬県と、アワボ名称とヌルデの結びつき

が顕著な宮城県北から岩手県南一帯を取りあげ、そこでの樹木選択の様相を確認していく。
第三節では全国に視野を広げ、こういった樹種が用いられる傾向にあるのかを俯瞰する。

本章で強調しておきたいのは、数ある樹木のうちから特定の樹種が明確に、また意図的に選びとられているということである。これから検証していくように樹種はかなり限定されており、なかには特定の名称（用途）を持つ削りかけが特定の樹種と結びついている場合もある。しかもそこで選択される樹種は列島の広い地域にわたって共有されており、単に入手しやすい、加工しやすいといった物理的要件に適う樹种群から偶然に選ばれたとは考えにくい。つまり、樹種選択の背景に、特定の木を祭りに用いる木として選ばせるような樹木文化があったことが想定されるのである。

第一節 群馬県下の削りかけと造形・名称・樹種 ——ツクリモノとヌルデ

本節で取りあげるのは削りかけ習俗がもっとも色濃く分布する群馬県における樹種選択の様相である。すでに第Ⅰ部一章でも触れたように、群馬一帯の小正月では、削りかけのほかにもアワボヒエボや粥かき棒、カタナ、ハラミバシなどの木製品が盛んに作られる。これらは総称してツクリモノと呼ばれるが、同じ小正月に作られる木製品として、削りかけもツクリモノのひとつに数えられることが多い。また実際に、アワボヒエボや粥かき棒、カタナなどに削りかけが施されることも少なくなく、ツクリモノと削りかけは造形的にもしばしば重なりあう。そこでここでは、削りかけの周辺に連なるツクリモノも含めて検討することで、かえって、小正月の木製祭具のなかにおける削りかけの位置づけを明確にしていきたい。

図1は『小正月のつくりもの』〔群馬県教育委員会 一九八七～一九九一〕および『上州の小正月ツクリモノ』〔群馬県立歴史博物館 一九九五〕に掲載の小正月の木製祭具の素材を示したものである¹。ここでは、祭具の造形・用途・名称のうち、もっとも把握しやすい「名称別」に、その素材をまとめている。表の左はハナ系名称と呼ばれる祭具で、削りかけの形状を採る。「ハナ」については、写真資料や図版などから判断できる限りにおいて形

図1 群馬県下の小正月の木製祭具と樹種

名称 (地区)	ハナ						ツクリモノ					
	特 型	片 型	段花型 2.5 10cm 径	吊花型 サザリ ノシ	開花 型	制 り 片	覆 き 紙	カ タ 子	網 糊 糊	平 巻 着	道 草 形	タ タ ミ
地域												
六合村入山	■						■	■	■			■
荷付湯	■						■	■	■			■
長野原田林	△	△	△				■	■	■	■	■	■
菅葉町松谷	◎	◎	◎	◎			◎	■	■	■	■	■
中之島町五反田	◎	◎	◎	◎	◎	◎	■	■	■	■	■	■
大塚	□	□	□	□	□	□	■	■	■	■	■	■
小野上村村上		□	□	□	□	□	■	■	■	■	■	■
子持村上白井		□	□	□	□	□	■	■	■	■	■	■
藤岡市金井	◎	◎	◎	◎	◎	◎	■	■	■	■	■	■
安中市露宮	△		△				■	■	■	■	■	■
榛名町下里見	◎		△				■	■	■	■	■	■
万堀町万堀					◎		■	■	■	■	■	■
中里村柳ヶ原			■				■	■	■	■	■	■
上野村柳ヶ原	■		■				■	■	■	■	■	■
下仁田町青倉	△	△					■	■	■	■	■	■
上小版	■						■	■	■	■	■	■
甘藷町秋畑	△		△				■	■	■	■	■	■
松井田町新堀	◎		◎				■	■	■	■	■	■
沼田市佐山	□		◎				■	■	■	■	■	■
川田	□		□				■	■	■	■	■	■
白沢村尾合	◎				◎		■	■	■	■	■	■
利根村穴原	□						■	■	■	■	■	■
園原	□						■	■	■	■	■	■
片品村土出							■	■	■	■	■	■
新井							■	■	■	■	■	■
花咲							■	■	■	■	■	■
川湯村谷地	◎			□	□	□	■	■	■	■	■	■
木賊							■	■	■	■	■	■
月夜野町吉平	◎		◎				■	■	■	■	■	■
小川	◎		◎				■	■	■	■	■	■
水上町寺間	■						■	■	■	■	■	■
新井	◎						■	■	■	■	■	■
新治村沼湯	■						■	■	■	■	■	■
入須川	△		◎				■	■	■	■	■	■
真壁須川	◎		◎				■	■	■	■	■	■
昭和村生徳			◎				■	■	■	■	■	■
宮城村市之間			◎				■	■	■	■	■	■

名称 (現況)	ハナ					ツツリモノ					
	剪り片	開花型	吊花型 ノズ	線花型 2.5 線	片剪型	薔薇標	カネ子	御落椿	草ひ密	道邊形	タツミ
大朝町浅木				区		区		区	△		
大朝町見立				区				■	■		
北橋町小室				区		区		■	■		
富士見村米野				区				■	■		
前橋市猿廻町				区				区			
青梨子町				区				区	△		
鍛冶井町				区				区			
廣小坂戸			区		区			■	■	■	赤村
赤塚町今井								区	区		
鼓澤本町大久保				区	区			■	■		
新里村山上				区	区			区	■		
粕川村月庄				区	区			区	■		
鶴林市日向町				区	区			区			
伊勢崎市上之雪						区		区			
黒保根村下田沢	区			区	区		?	■	■	■	赤村
下田沢				区	区			■	■	■	赤村
上田沢					□			■	■	■	
桐生市川内町				区				■	■	■	
大間々町小平				区	区			■	■	■	
玉村町綿石				区	区		?	■	■	■	
南朝町上小瀬町				区				区	区		

【凡例】 ■ アルプス □ ミズキ ○ カルミ ⊕ コメゴメ (標準和名を不明) ⊗ キズツ
△ その他 (コウゾ・ミヅバカツキ・ハギ・ムラサキミズギ・ヤナギ類等) ? 不明

註）凡正月のつくりもの（群馬県総合博物館）複製の複製地のうち、制りかけの造形物を作る地域を取りあげ、当該地域の正月の主要な木製玩具の資料を「ハナ」系名称・「ツクリモノ」系名称別に示した。『上州の正月ツクリモノ』（群馬県立歴史博物館）も参照した。「ツクリモノ」類の数のうち、制りかけの旗であるものをハナ目を ■ で示した

形状区分

「片断型」 あるいは数片だけ断つて垂らしたものの

「片断型」片断のみ、あるいは数片だけ削って垂らしたものの


「模範型」 1本の不揃いに短い刈りを何段か削り、花を串刺しにしたような状態にしたもの
2、3段階程度の短いものと、8段、12段、16段などの長いものがある

「所花望」 削りを長く置いて刃のように重なり、芯線から切り離したものを、吊るして幹をこのうち揃えているものを「デゾリ」




箱がつかないよう削ったものを「ノシ」とする

「附だれ」
削りを荷のたのうに短く巻いて志保から切り船したもの。削竹に押すなどして削る

「削り片」削りを2、3本〜5、6本程長く揃って芯棒から切り離したものの

状別の素材も示しておいた。一方、表の右にはツクリモノと総称されるような祭具の名で呼ばれる造形物をまとめている。このツクリモノのなかには削りかけの形状をとるものも多数見られ、表のマス目に網掛け（）してあるものがこれに該当する。

(1) ハナ／ツクリモノ系名称と素材の連関

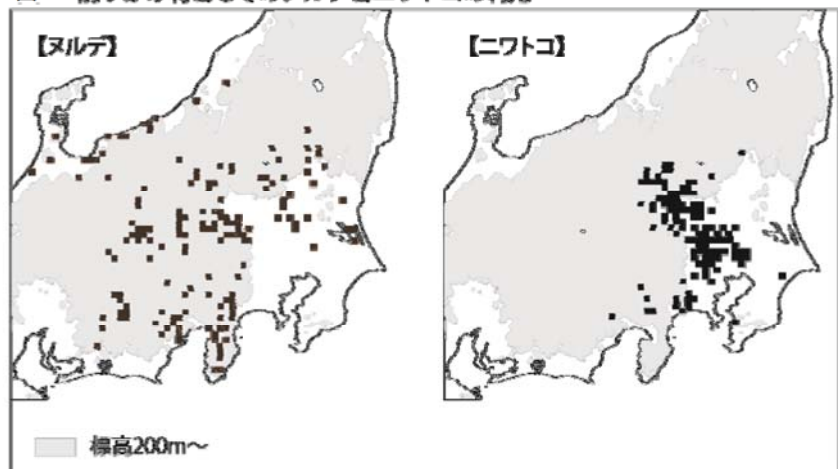
この表を眺めるといくつかの興味深い事実がわかる。一瞥してわかるように、表の右は全体的に黒く、左は白い。つまり「ツクリモノ」にはヌルデ（）が使われる確率が高いのに対し、「ハナ」には圧倒的にヌルデ以外の木が使われるのである。これを削りかけ状の造形物に絞って考えるとどうなるだろうか。「ハナ」すべてと、「ツクリモノ」のうち削りかけ状のもの（のもの）を合わせた素材の採択率をみると、めばしい樹種でニワトコ（スイカズラ科）三五・八％、ヌルデ（ウルシ科）二四・二％、ミズキ（ミズキ科）一五・八％となっており、ニワトコに次いでヌルデが多い。しかし、ハナ系名称の削りかけに限って素材の採択率を算出すると、ニワトコが四三・六％、ミズキ一九・二％であり、ヌルデは一〇・三％しかない。反対に、ツクリモノ系名称を持つ削りかけ（のもの）の樹種はヌルデが圧倒的に多く、約六二・五％を占め、次いで多いニワトコ（一五・六％）を大きく凌駕している。つまり、同じ地域で同じ小正月に作る木製品でありながら、ツクリモノ系名称の削りかけはヌルデで作られ、ハナ系名称の削りかけはミズキやニワトコ、クルミ、キブシ（キブシ科）などで作るといった使い分けをしている地域が大多数なのである。六〇事例中、「ハナ」にもヌルデしか用いないのは七地域のみで、ヌルデの利用は「ツクリモノ」に大きく傾いている。単に物理的理由から樹種を選択しているのであれば、こうした使い分けは必要ない。つまりそこには明確に、特定のツクリモノと樹種のあいだの結びつきが見いだされるのである。

次に、ツクリモノ系名称の祭具全体でヌルデ以外にどのような木が使われているかをみていくと、ニワトコを使う地域が一六例（併用も含む）、ミズキ 七地域、クルミ 二地域となっており、ニワトコが最も多い。さらにミズキのうちの四例は、「タワラ」のみにこれを

用いている。I ー一章でも触れたとおり、タワラはほかの祭具を作った余材を束ねて作られる例が少なくなく、その他のツクリモノとは樹種利用の在り方が異なっていることが推測される。そうしたタワラの例を除けばニワトコの利用はより際立っており、このことは、ツクリモノ材としてのヌルデとニワトコとが、比較的置き換わりやすい樹種であることを示すものと捉えることができる。ヌルデの代替としてのニワトコ（あるいは、ニワトコの代替としてのヌルデ）は、地理的にみるとより鮮明である。図2は関東一円においてニワトコ、ヌルデそれぞれが素材として選択される地域を示したものであるが、この二種の木が地域によって使い分けられていることがよくわかる。これに等高線を重ねあわせれば、平野部のニワトコ、山手地域のヌルデといった使い分けが明瞭に見いだされる。ニワトコが平野部で多く見られるのは、「庭常^{にわとこ}」の名が示す通り、この木がしばしば庭や畑など家の近くに植栽されることと関わりがあると考えられ、平野部や、手近な山がない地域ではこの材が調達しやすかったものと思われる²。このことは樹種の生態的生育環境が樹種選択に影響していることを示すと言える。しかしその一方で、その選択が一定の地域的広がりを持ちながら共有されていること、またニワトコをわざわざ庭に植栽していることは、樹種選択を促すものが、樹木生態という合理的・実地的なものから、文化という位相にすでに移されていることをも示している。

最後に留意すべきは、削りかけの形状と樹種との関係である。先にも触れたとおり、ヌルデは「ハナ」材としてはあまり用いられないが、その数少ないヌルデの例は、ほとんどが削りが短く、縮れない

図2 削りかけ材としてのヌルデとニワトコの利用



註) 削りかけ材にヌルデ・ニワトコを選択する地域を5キロ四方の網目で示した自治体史・報告書等の二次資料に拠る (出典略)

形状のハナ（片幣型、段花型、開花型など）に集中している。つまり、ふさやかな削りを長く垂らしたような削りかけ（幣型・吊花型）にはヌルデはあまり用いられないのである³。これにはもちろんヌルデの材質が影響している。それは、群馬県下の小正月のツクリモノに関して詳細な事例研究を行なった阪本英一が、ヌルデは「ハナ木としても、ツクリモノの木としても使われた。ハナは、木の性質もあってこまかいハナでなく、チヂレの粗い大きなハナや、竹にさす『菊花』として十六段菊やコンコチなどが作られた」〔一九九七 三三〕と述べている通りである。このことは、樹種と造形とが互いに結びついていることを示す点で重要である。その意味において、樹種の選択は造形の選択だと言え、特定の造形と樹種とが相互に影響しあう形で、ひとつのモノとしての削りかけが形作られていたことがわかる。一方で、ふさやかな削りかけに多く用いられるのがミズキで、幣型・吊花型を作る二十八地域中、併用も含めれば一三地域でこの木が用いられている。そうした樹種選択の在り方はそのまま、色の白い、繊細な縮れを持つ造形への志向であったと考えてよいだろう。

（2）樹種選択が示すもの

群馬県におけるこうした樹種利用の在り方はふたつの重要な視点を示してくれる。第一には削りかけとヌルデの関係である。従来の研究においてヌルデは削りかけと縁の深い木と捉えられており、先にも示したとおり、どの辞典類や概説書をめくってもこの木が素材の筆頭に挙げられている。しかし、削りかけの形態・名称・用途と樹木との関係を追っていくと、その利用はツクリモノ系名称を持つ削りかけに大きく偏っていることがわかる。これは図 1 で見たとおり、そもそもツクリモノとヌルデという素材がセットとして親密に結ばれている（と人々に認識されている）ためと考えられる。そしてその結びつきが、ツクリモノ系の削りかけ（削りかけの施されたカタナや粥かき棒、ハナの形状をしたアワボヒエボなど）の樹種選択に際しても適応されていると捉えてよいだろう。一歩進んで言えば、ツクリモノとヌルデの結びつきは小正月とヌルデの結びつきと読み換えることができ

るかもしれない。小正月以外の儀礼・行事に作られる削りかけの材に、ヌルデはあまりみられないからである。たとえば春彼岸のハナはヤナギ類やニワトコ、コシアブラが圧倒的であるし、紀伊山地のケズリバナはヒノキ、スギが主、大師講のツエは管見のかぎりすべてハギ類といった具合で、小正月以外のヌルデの利用は例外的なレベルに留まっている。このことはアイヌのイナウとの比較を視野に入れた場合、興味深い問題を提示している。ヌルデは植生としては北海道南部までを分布域としながらも、これをイナウの材とする例は管見の限りまったく知られていないからである。その意味においては、ヌルデという選択はきわめて和人的な文化の影響下にあると捉えることが可能かもしれない。

ツクリモノとヌルデの結びつきはまた、削りかけの素材に対する従来の認識のずれも浮き彫りにしている。削りかけを今日の御幣の原型として捉えた場合、意識的にせよ無意識的にせよ、そこでイメージされるのは白い木肌を露わに削り垂らした幣型や吊花型の造形であろう。しかしすでに確認したとおり、そうした削りかけはヌルデとはあまり結びつかず、群馬の例ではむしろ多く用いられるのはミズキなのである。

第二点目として重要なことは、削りかけのかたち（形態・名称・用途）と樹種とがそれぞれ密接に相関して顕われていることである。それはすなわち、人々がこれらの木を注意深く選んでいるという事実を示すものである。たとえばツクリモノにヌルデが多いのは、粥かき棒やハラミバシにはヌルデを用いるものだという慣習・観念に基づき、明らかにヌルデを選択している結果である。そもそも、同じ地域でハナにはミズキやクルミ、ニワトコなどを用いているのだから、入手しやすい、加工しやすいというだけなら、ほかにも使用に適した樹種はいくらかもある。しかし人々は、数ある使用可能な樹種の中からあえてヌルデを選択しているのである。そこには明確な選択の意思があるといつてよい。

第二節 岩手・宮城県の小正月の木とその選択 —— アワボ名称とヌルデ素材

次に岩手・宮城県の削りかけ習俗を取りあげ、当地での樹種利用の様相を検討することで、樹種の実選が厳密に行なわれていることを重ねて論じておきたい。

岩手県南部から宮城県北部の小正月では、アワボ、ユウガオなどと呼ばれるツクリモノが広く報告されている。木を削って作った花や輪切りの棒を、タケ類やクリに挿して門口や庭先、あるいは堆肥場、畑などに飾るもので、作物の実りを模擬的に祝う、いわゆる予祝行事とされる習俗である⁴。本節では、このアワボ、ユウガオなどと呼ばれる木製ツクリモノの材となる樹木に焦点を当て、それがひとつの地域内でどのように選ばれているのか、その具体的様相を明らかにしたい。当地のツクリモノに関しては、宮城県では及川宏幸の詳しい報告と分析があるほか〔及川 二〇〇四〕、岩手県では『岩手の小正月行事調査報告書』〔岩手県教育委員会 一九八四〕などに比較的まとまった報告がみられる。ここではこうした先行報告に自治体史や報告書等からの文献資料、またフィールドワークによる一次資料も若干加え、習俗の全体像を把握していく。

(1) 岩手・宮城の小正月のツクリモノ

はじめに、用いられる樹種に注目しながら、三つの典型的な事例を簡単に紹介しておきたい。ただし、③は文献資料からの引用である。

① 岩手県川井村小国（湯澤孝さん、昭和三年生まれ）

ワカキムカエといって正月一日までに三年生くらいのクリ、三～四年生の「ホングルミ」（和名オニグルミ）の枝などを採ってくる。このうちクルミは二〇～三〇センチに伐ってから常用のナタでザクザク削って削り花にし、門前に立てた一対のクリの木にそれぞれ五〇個くらい成らせる。これをユウガオの花とかナリキなどという。一月いっぱい飾っておき、クリは後に稲バセのイナグイにした（写真 1～5）。 ※周辺地域の写真 6～8

② 岩手県の花泉町（現一関市）老松（千葉幸男さん、昭和三年生まれ）

正月一四日にカヅノキムゲーと言ってカヅノキ（和名ヌルデ）を山に採りにいき、アワ、ヒエ、ハナを作った。アワとヒエはカヅノキを二〇センチ程度に輪切りにしたもので、アワは

皮を剥き、ヒエは皮のままである。ハナは、常用のナタで押し出すように削るか、専用の刃物（先端が鉤型になったもので、ナタと呼ぶ）で手前に引いて削り、花を象る⁵。皮を付けたまま削ったものをオバナ、皮を剥がして削ったものをメバナなどとも言う。このアワやヒエ、ハナはクリの木に成らし、庭に一月いっぱい立てておき、その後は下ろしてすべて焚物として焼いてしまう。このほか、ササ竹にもハナを挿し、庭に立てた。

※周辺地域の写真 9～13

③ 登米郡東和町（現登米市）米谷相川〔小野寺 一九七一 七一〕より

「アワヒエ」として「十五日朝、カツノキ（ぬるで）を一尺ぐらいの長さに二本切り、一本は皮を取らず一尋^{ひろ}ぐらいの竹の先につけ、これをアワといい、他の一本は皮を取って鉋で削って花を作り、やはり竹の先につけてこれをヒエという。これらを松と注連縄をとり除いた門松の栗の木に結びつけておき、二十日ごろにおろす」ことが行なわれた（下線部・網掛引用者）。

以上、三つの例は素材となる樹種に違いが見られるものの、いずれも、小正月に木棒や削りかけなどの木製品を別の素材につけ飾り、作物の実や花を象ったとする点、また門や庭など屋外に飾る点において共通している。類例は、図 1・2 に点を付したように、宮城県北部から岩手県南部地域を中心に広く見られる。分布と習俗の概要について、詳しくは文末の表 2 を参照してもらおうとして、分布域の北と南の一带においてはクリや竹に輪切りの棒や削り花を成らすという比較的シンプルな形態が多く、その中間域——ちょうど岩手と宮城の県境を中心とする一带——では、木製品を成らせた一對の竹の間に注連縄を張ったり、一本のクリから縁側の柱などに注連縄を張り、そこに木製品や藁製品を挿むなど、習俗がより複雑に展開している⁶。象られる作物は、事例にも挙げたように粟や稗が多いが、ユウガオなどのウリ科の作物（ほかに瓜、^{かぼちや}南瓜、^{きゅうり}胡瓜など）も北へ行くほど目立って報告されている。いずれにしろ、作物を模した木製品を飾ることによる予祝行事という意味に



1～5：岩手県川井村小国、湯澤孝さん宅のユウガオ

門前にクリの木を立て、3～4年生のホンクルミ（和名オニグルミ）で作ったユウガオのハナを成らす（写真1）。写真3はハナの簡略化されたものでカナガラバナ（鉦カラ花）という。クルミの木片を裏表につけて止める。写真5が本来のハナで直径およそ29㍍。常用のナタで男の人が削る。1㍍のクルミから10㍍ほどのハナを削ることができる（写真4）

6：岩手県遠野市のケズリバナ。オニグルミなどのやわらかい木で作リ、クリの木につける



- 7・8：岩手県住田町世田米田谷のケズリバナ。門前に立てたクリにクルミの木で作ったハナと実をつける。ハナは直径25センチ程度で彩色が施してある
- 9～11：岩手県一関市蔵美町古館のキンコマンコ。11日の鏡開きの前に木を採りに行き、カツノキ（ヌルデ）でハナと実（キンコと呼び、稲穂を模したものという）を作る。ハナは直径およそ12センチ。15日朝にはクリにつけて座敷の前の庭に立てた。片付けるのは1月30日で、ハナもクリも燃料とした。現在ではカンナで削る「カンナバナ」だが、かつてはナタで削ったハナだった。
- 12・13：古館のナス（皮を剥かない棒）・キュウリ（皮を剥いた棒）・ナンバン（先をとがらせたもの）。カツノキで作って竹につけ、庭に立てる



において、これらが一連の習俗の展開か、少なくとも互いに強い影響下にある習俗と捉えて問題ないだろう。

(2) 素材の組み合わせと名称からみる分布の特徴

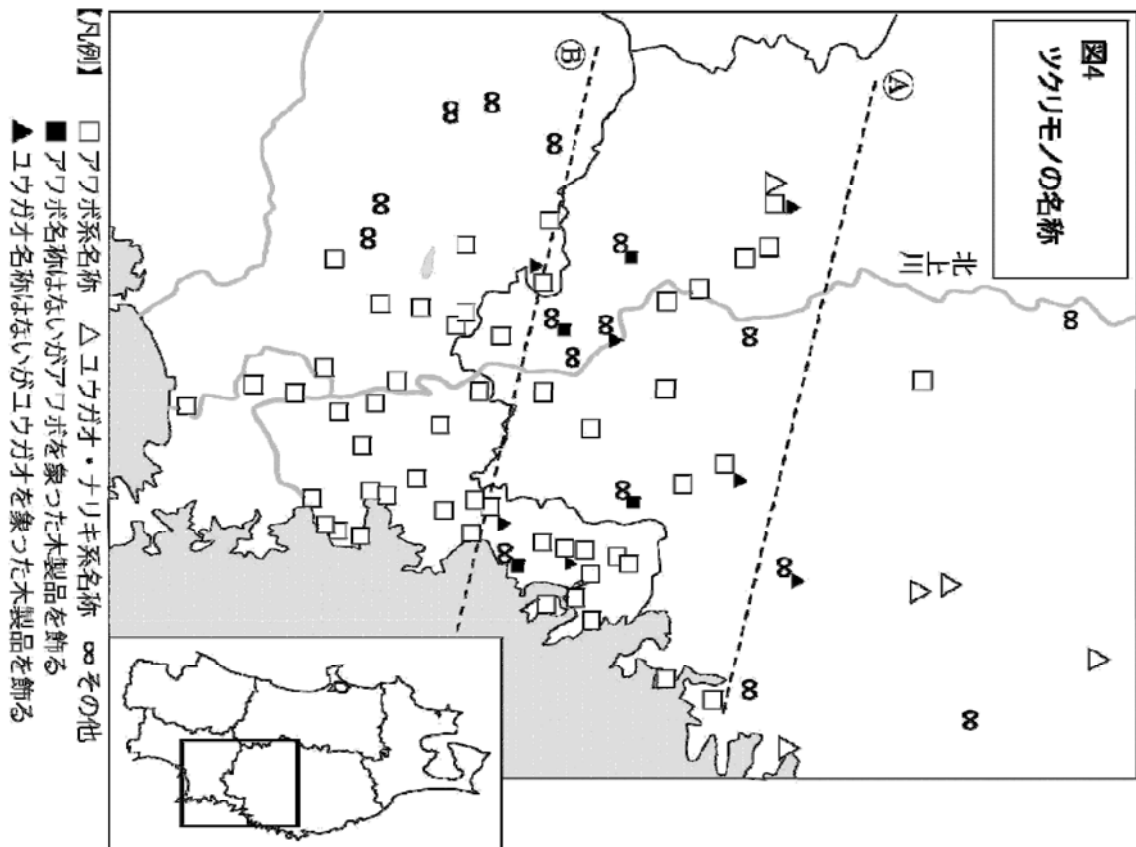
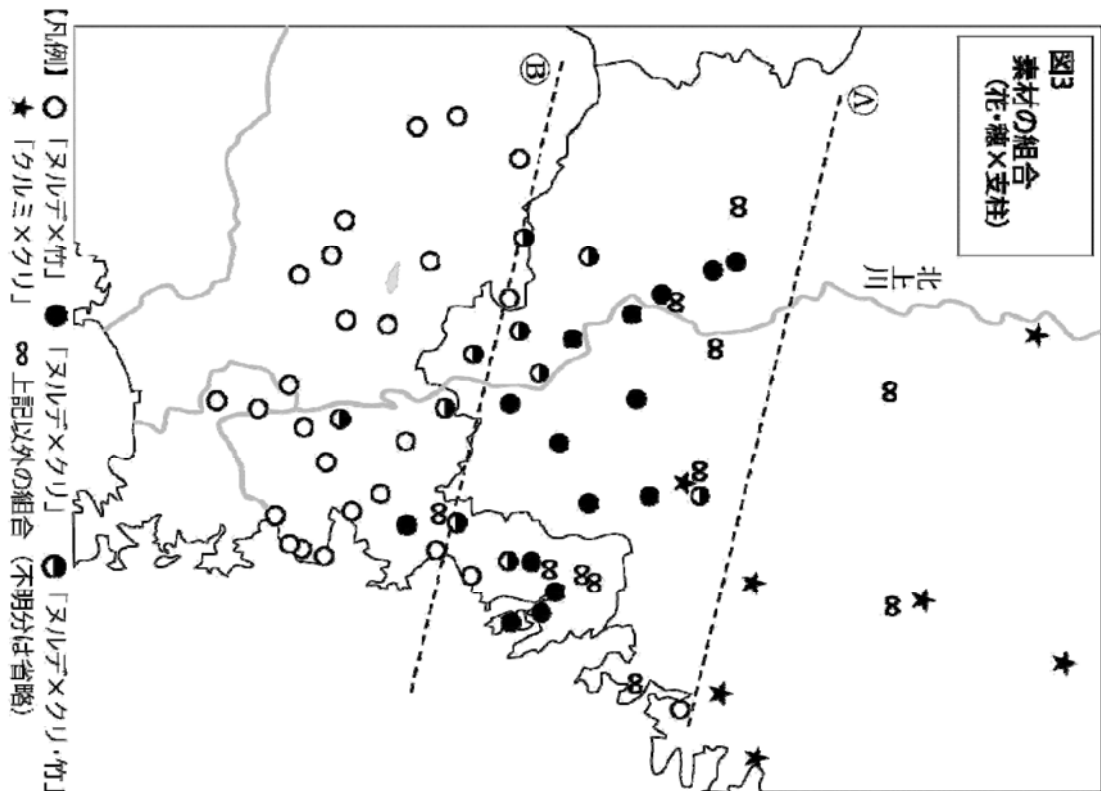
概要を簡単に確認したところで、素材となる樹木の視点から、分布域全体の特徴を俯瞰してみたい。図 3 は、習俗の伝承地のうちツクリモノの素材のわかっている地点（原則的に字単位）に、素材の組みあわせを示す記号を付したものである。素材には ①アワ・ヒエなどの穂の部分や削り花の材、②それを付ける支柱の材 の二種類があるが「①穂・削り花 × ②支柱」の組み合わせを、

★「①クルミ × ②クリ」 ●「①ヌルデ × ②クリ」 ○「①ヌルデ × ②タケ」

と顕わした（樹木の和名に関しては註7）。記号「∞」は右記以外の組みあわせであるが、数は少なく、多くは ①クルミかヌルデ／②クリかタケ を組みあわせたものであることがわかる。

さて、素材となる樹木の組みあわせからみると、分布域一帯を凡そ三つに区分することができるだろう。「削り花・穂 × 支柱」の素材が、A 以北の「クルミ×クリ」地帯（★）、B 以南の「ヌルデ×タケ」地帯（○）、そしてその中間の「ヌルデ×クリ」地帯（●）である。先に紹介した事例で言えば、事例①が「クルミ×クリ」地帯、事例③が「ヌルデ×タケ」地帯にあたる。その中間地帯である「ヌルデ×クリ」地帯では「ヌルデ×クリ」の組みあわせがもっとも多く報告されているものの、事例②にもあるように、集落内で、あるいはひとつの家のなかで「ヌルデ×クリ」「ヌルデ×タケ」の組み合わせが混在している例（●）も見られ、南北の境界地帯の様相を示していると言える。こうした素材の組みあわせは各地帯で高い確率で選り採られており、一定の地域内で樹木の選択の作法が共有されていたことが視覚的にもよく了解される。

樹種の選択とあわせてもうひとつ特筆すべきは、ツクリモノ全体を指す呼称についてである。これは図 4 に□と△の記号で示した。□はアワボ、アワボヒエボ、アワヒエ、アワ



注) 資料はすべて自治体史・報告書等に拠る (出典略) 記号は原則的に字単位で付したが、資料に記載がない場合に限り市町村役場のある地点に付した

ボウヒエボウなど、いずれも「栗」という意味をあらわす言葉をふくむ名称、△はユウガオまたはナリキという呼称である。小さく■とあるのは、総称としては用いないものの、アワの名前を冠したツクリモノを飾る地域⁸、同様に小さな▲は、総称は異なってもユウガオと呼ばれるツクリモノが含まれる場合である。その他の名称、不明なものなどは「∞」であらわした⁹。

名称に関しては、ライン A あたりにひとつの境界をみることができるだろう。A より南の地域で圧倒的に多いのがアワボヒエボ系、アワボ系の名称で、宮城県下に限れば、及川宏幸が指摘するように、アワボヒエボ系の名称が全体の七割弱、アワボ単独名称が一割強と、全体の約八割を占める〔及川 二〇〇四 七五～七六〕¹⁰。A ライン以北は「ユウガオ」や「ナリキ」といった呼称が用いられるが、事例数が少ないこともあってかアワボ系ほど強固なまとまりは見られない。

一方、A～B の中間地帯では、小さな■や▲が多い。つまり、ツクリモノ全体がアワボ系の名で呼ばれていても、ユウガオを象った木製品を飾ったり、逆にアワボ系で総称されていなくてもアワボと呼ばれる木製品を飾ったりするケースが見られるのである。このことは、先に示した素材の組みあわせのみならず、名称という観点から見ても、ここが境界領域であることを示すものと言えよう。

ライン A を境とするこうした名称分布は、別の見方をすれば北上川流域を中心とする分布域／その他に区分することもできるかもしれないし、旧仙台藩領の北限域を分布の区切りと捉えることも可能かもしれない。しかし、ここでは伝播の問題や分布論に立ち入る余裕がないため、さしあたってアワボ系名称がまとまってみられることを確認できればよい。くりかえせば、アワボ系名称の北限域はライン A の周辺に設定してよいだろう。

(3) 樹種と名称の緊密な結びつき——ヌルデとアワボから

さて、ここまで素材の組み合わせと名称について確認してきたが、二枚の分布地図を重ねあわせると興味深いことがわかる。材にヌルデを用いる範囲と、そのツクリモノをアワ

ボ系名称で呼ぶ範囲が、ライン A の前後でほぼ一致しているのである。ライン A 以南では、「名称／穂・花の素材」の組み合わせは、「アワボ／ヌルデ」が圧倒的である。具体的には、A 以南では、支柱の材がクリ、タケと異なっていってもヌルデは一貫して使われており、アワボ系名称でありながらヌルデを用いない地域はほとんどみられない。反対に、アワボ系名称もアワボを象ったとされるツクリモノも、いずれもみられない地域では、ヌルデは素材としてはほとんど使われない。ヌルデとアワボがこうして緊密に結びついて顕われるのは、ヌルデという素材が、アワボと呼ばれるツクリモノにとって不可分な要素であったことを窺わせるものであり、「アワボ／ヌルデ」という結びつきが、もとよりセットとしてあったことをも思わせるものでもある。また見方をかえれば、それは人々が両者の関係を認識し、厳密に樹種選択をしてきたことの顕われとも言える。

そもそもアワボ系名称を持つ木製のツクリモノ¹¹は、濃淡はありながらも列島上に広く見いだすことができるが（I ー一章参照）、これまで収集しえた資料によれば、アワボと名のつくツクリモノの材（穂やハナにあたる部分）は全国的にみても圧倒的にヌルデが多い。アワボ系名称のツクリモノが伝承され、かつその素材がわかっている例は、これまで全国からおよそ四〇〇例（字単位）収集しているが、そのうちヌルデを用いる地域は六二％近くに及んでおり（その他の樹種との併用含む）、次いで多いニワトコ（およそ二二％、併用含む）をはるかに上回っている。このうちニワトコは関東を中心とする地域で多用されるのに対し、ヌルデは関東中山間部を含め、信越、中部、四国、九州と、アワボ分布の全域で用いられており、ニワトコをはるかに凌駕している。ヌルデとニワトコ以外の樹種が選ばれる確率は一六％程度で、そこには数多くの樹種が含まれているから、そのうちほとんどが例外的な数字に留まっているとみなしてよいだろう¹²。

こうした状況は、アワボ系名称のツクリモノとヌルデという素材が、全国的にみても高い親和性をもっていることを示すといえる。それは、手に入りやすい、加工しやすい、あるいは木肌が白い等の物理的・合理的理由から偶然に同じヌルデという木が選ばれたとするには、あまりにも高すぎる親和性である。むしろそれは、人々がその結びつきを認識し、

意図的に樹木を選びとってきたことの顕われであり、また、その認識が岩手・宮城両県をふくめた広い地域で共有されてきたということでもある。そうした認識体系を仮に樹木文化と呼んだならば、ヌルデを祭りの木の材とする樹木文化圏が列島上においてある広がりを持ってみられたと言えるのである。

一方で岩手のユウガオ地帯など、「アワボ／ヌルデ」を用いない地域があるのも示唆的である。これまでヌルデは小正月のツクリモノの材として常に筆頭に挙げられてきた。しかしここで示したように、一見連続する習俗が広がっているように見える地帯でも、すこし高度を落としてみれば、樹種は名称や意味づけによって異なっており、どの造形物にも一様にヌルデが用いられているわけではない。樹種はより厳密に選り分けられており、本論の文脈でいえば、その「樹木文化」は決して列島上で一様ではないのである。

第三節 全国における樹種の選択とその傾向

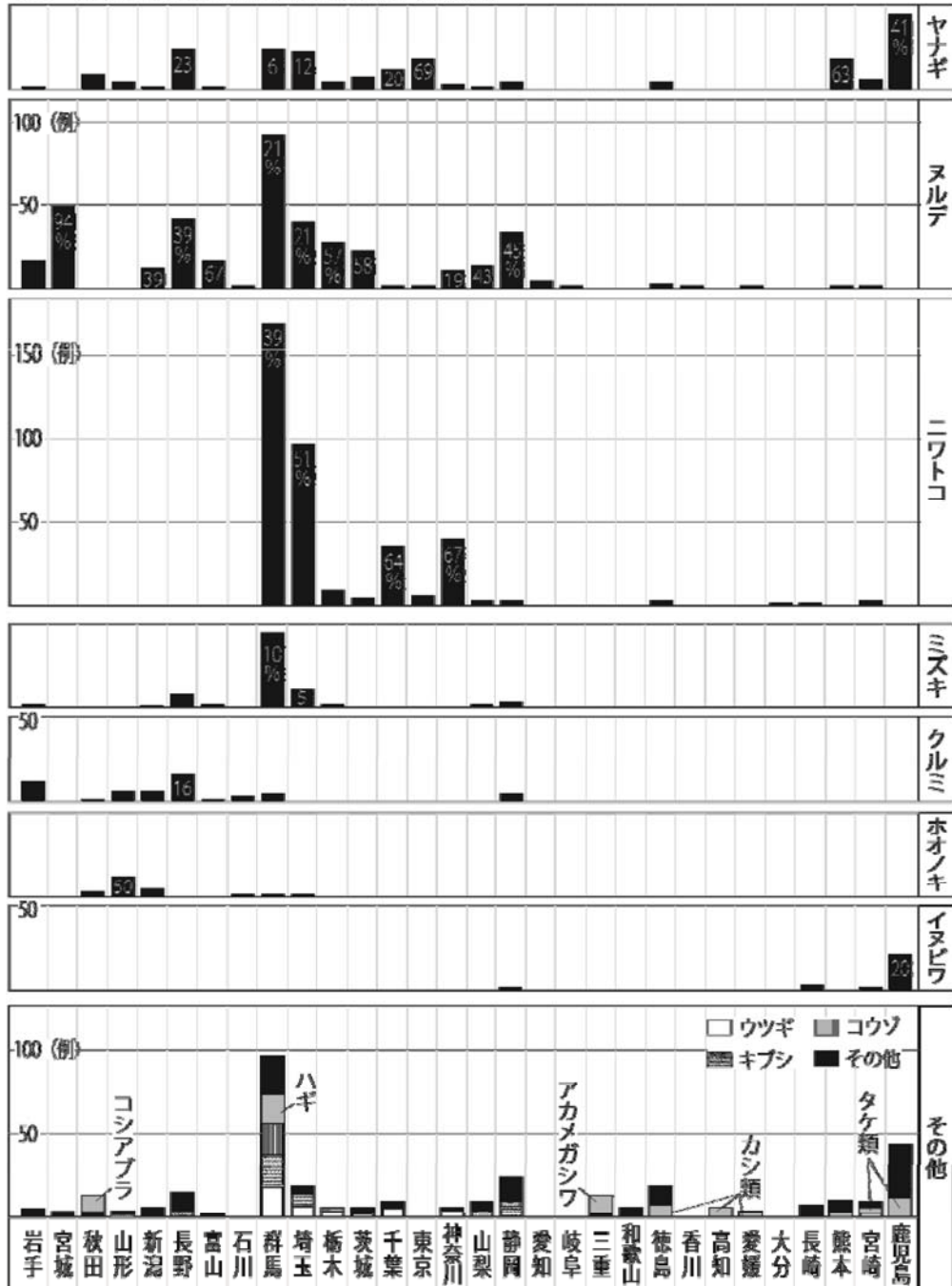
ここまで群馬県と宮城・岩手県の例から、削りかけに用いられる樹種と、それらが意図的に選択されていることを示してきた。次に削りかけ全体の樹種に視野を広げ、収集事例から全国的にどういった選択の傾向を読みとることができるのかを論じたい。

(1) 全国の樹種選択の傾向

図5は小正月の削りかけの材に選ばれる樹木を都県別にグラフ化したものである。数種類の樹木が偏って用いられていることが明瞭で、全国的にみても樹種が選択されていることがみてとれる。具体的に確認しておきたい。

まず全体的に数が多く、分布も全国に及んでいる木は、ヌルデ、ニワトコ、ヤナギ類の三種であろう。ヌルデとニワトコに関しては、関東から中部にかけての利用が突出している。その高い選択率は、先の群馬の例に照らせば、この一帯がツクリモノ製作の盛んな地域であることと関連すると考えられ、これらの木が特定の造形物の材として高い頻度で選択された結果とみることができる¹³。同様のことは岩手・宮城にみられるヌルデ利用にも言

図5 削りかけ材となる樹種の選択傾向（地域別）



註) 自治体史・報告書等の二次資料、フィールドワークによる一次資料に拠る（出典略）。棒グラフは各都県内で当該樹木を採択した地域（原則的に市単位）の数を示す。但しひとつの地域で複数の木を選択する場合は、各々1と数えた。棒グラフ上の白抜き数字は各都県内での当該樹木の採択率を示す（小数点以下切捨）。樹種名については、和名が記してある場合は原則的に採用し、方言名のみの場合は、周辺地域の事例と照らして特定可能と思われるもののみ取りあげた。

え、すでにみたように、この一帯でヌルデが用いられるのはアワボ系名称で呼ばれる造形物にほとんど限定される。つまり、ことヌルデに関しては、ツクリモノなどの造形物との関わりを配慮しながらグラフの偏りを読む必要があるといえる。

以上のことを考慮に入れると、むしろ注目すべきはヤナギ類¹⁴であろう。西日本も含め、全国的にもっとも満遍なく、かつ広範に利用されているからである。収集資料から確認すれば、東北日本海側から長野、関東（とくに東京近辺）、中部のほか南九州で報告例が多い。全国的に言ってケズリカケ系の呼称を持つものが多いのも特徴で、長野や東京、鹿児島などでケズリカケ名称のヤナギの削りかけがまとまって報告されている。近世の記録のなかでも素材として頻出するのがヤナギで（次節参照）、削りかけとは深い縁故にあった木であることが知られる。

つぎに地域的分布を示す樹木を確認したい。まず筆頭に挙げられるのは東日本一帯のミズキであろう。木肌が群を抜いて白く、また柔らかく加工しやすいこの木は、第一節で確認した通りふさやかな削りかけを作るのに用いられることが多い。東北一帯から、とくに日本海側を南に下るかたちで広がる分布域では、クルミ科の木やホオノキ（モクレン科）の利用が特徴的にみられる。クルミ科の木は具体的な種を記していない報告が多いが、東北に分布するオニグルミとサワグルミのうち、調査では実を食べるクルミ、すなわちオニグルミとする例が多かった。西日本では最も色濃い分布地である南九州でイヌビワ（クワ科）の利用が見られるのが特徴であろう。イヌビワは関東以西の本州、四国、九州の暖帯山野にごく普通に見られる木で、「タブ」「タビ」系の方言で呼ばれる木がこれに比定できる¹⁵。この木は南に行くほど多用される傾向にあるようで、屋久島などではほとんどが「タブ」製の削りかけである。

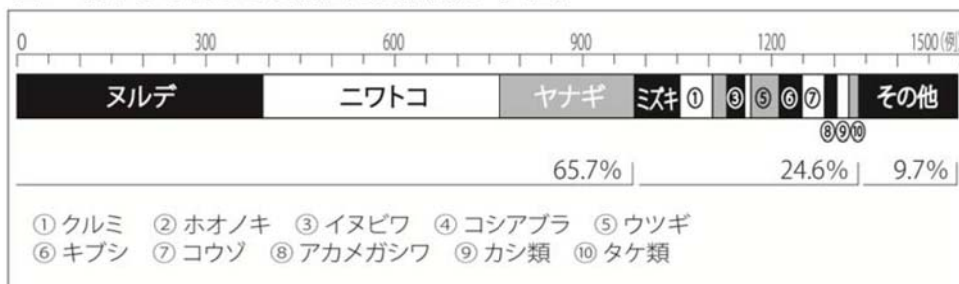
このほか、その他としてあげた樹木では東北地方でコシアブラ（ウコギ科）の利用が目立つ。ただしこの木は、削りかけを専門に製作・販売する地域において集中的に選択される傾向にあり、春彼岸の削りかけなどもコシアブラが圧倒的である〔今石 二〇〇八 a 二五四〕。ツクリモノのさかんな関東地方から中部にかけてはキブシ（キブシ科）やウツギ属

の木、コウゾ（クワ科）などが比較的頻繁に確認される¹⁶。西日本では紀伊半島の東岸部にアカメガシワ（トウダイグサ科）の利用が、局地的ではあるがまとまって見られる。近畿から四国にかけてはカシ類（ウバメガシなど）、南九州の宮崎から鹿児島にかけてはタケで作られた削りかけが報告されているのが特徴的で、これらの木が西日本でしか選ばれていないのは、植生分布の影響を直接に受けたものと捉えることができるだろう。

以上、全国で選ばれる樹種を確認してきたが、ここで注目したいのは、各都県内でそれぞれの樹木が採択される割合である。採択率はまとまった報告事例のある地域について、図5のグラフに白抜きの数字で表わしており、たとえば埼玉県下では五一%の地域がニワトコを、二一%がヌルデ、一二%がヤナギ類を選択しているということになる（ただし併用もある）。これを見ると、どの都県でも同一地域内で三割以上の採択率を保つ木が必ずあること、すなわち樹種は異なるものの、何らかの木が地域ごとにまとまって選ばれていることがわかる。このことは、それぞれの地域で人々が意思をもって特定の樹種を選んでいることを端的に示すものと言える。

さらには、全国的にみて数種類の限定された樹種に利用が集中しているという事実は、そうした選択の意思が各地で空間的な広がりをもちながら共有され、いくつかの文化圏を形成していたことを示すものと捉えられる。図6は全国においてどの樹種がどのくらいの地域で選ばれているのかを示したもの（図5の数値をあわせたもの）であるが、これを見ると、全国的分布を示すヌルデ・ニワトコ・ヤナギの三種で全体の六五%以上を占めていることがわかる。また先に挙げた局地的分布を示す樹木の採択率はすべてあわせて二五%弱となっており、先のヌルデ等とあわせれば、これら一四種で全体の実に九割以上を占め

図6 削りかけ材となる樹種の実績傾向（全国）



※ 資料等に関しては図5に準じる

ている。残り九%強はそのほかの樹種となるが、そのわずか九%のなかには三〇種以上の樹木が含まれており、いずれも例外的なレベルに留まっていることがわかる。各地域での多様な植生を考えれば、列島全域でこれだけ限定的な樹種しかみられないことは、たとえば、単に白い、削りやすい、入手しやすいといったような実用的観点から偶然にも同じ樹種が選ばれた可能性を否定するものであろう。くりかえすように、こうした樹種の高い限定性は、列島上にみられるいくつかの（樹木）文化的背景がそれぞれ共有されたうえで、特定の樹木が選ばれていることを示すものであろう。

(2) 近世史料にみる削りかけと樹木

ところで、こうした樹種選択の傾向は少なくとも近世後期まで遡ることができる。数は多くないものの、残された史料からは樹種選択に大きな変化がなかったことがわかるからである。

表 a は近世の削りかけ関連史料のうち、樹種の明記してあるものを挙げ、右に現代の伝承を対照させたものである。現在伝承されている樹種については当該地の記録か、それがない場合は近隣の土地の記録を示してある。これを見れば、多くの土地で、材として用いる樹種に変化がないことがわかる。

まず例外的なものから確認しておく。表のなかで、現在はその利用があまりみられない樹種がマツである。これは、現在ほとんど伝承が確認できない愛知、広島のほか、水戸や江戸などでも報告がある¹⁷。とくに門松を削るとする地域があるのも、門口をめぐって門松から削りかけへと、同じ樹木が再生されている点で興味を引く。ただしこれらの慣習は、序論でみた古今伝授の「やんごとなき方にては初子の日に小松を引きて、其の小松を百茎削りて、御所の東の方に掛け」たとの言を思いおこさせるもので、城下町などの都市部のみでの慣行であった可能性も指摘できる¹⁸。いずれにしろ、伝承が途絶えてしまっているので明確なことはわからない。

このほか材に変化がみられる地域もある。秋田では小正月のホタキ棒に用いる材として

近世には「柳」が用いられており、また、明治三一年の『秋田沿革史大成』にも「柳ニテ拵ヘタル ホフタキ棒ト唱フルヲ以テ女子ヲ見ルヤ男児ヲ産メトテ突クヲ祝トス」〔橋本一八九八 付二二〇〕とあるから、近世から近代初頭にかけては、主にヤナギ科の樹木が選ばれていたことが推定される。近現代の資料のなかにもヤナギを用いるとする地域は少なくないものの、I-四章でも確認したとおり、現在伝承されている例ではウコギ科のコシアブラのほうが一般的である。しかし、ヤナギからコシアブラへという材の変化は、ホタキ棒の製作が職人によって担われていたことの特殊性に因るものと考えられる。つまり、専門の作り手が周辺地域一帯の需要を満たすかたちで製作に当たったために材の不足が生じ、近年になって代替材としてコシアブラが選択されたものと考えられるのである（註19参照）。

こうした例を除けば、近世から近現代にかけて用いられる樹種には大きな変化がない。真澄の記録した岩手県胆沢町は、第二節でみた「ヌルデ（花の材）×クリ（支柱の材）」を用いる地帯である。近世にヌルデを使った祝い棒が報告されている新潟県長岡市近辺では、いまでこそ伝承が聞かれないが、周辺の中越から上越地方の沿岸部ではサイノカミ行事に関連するヌルデ製の木偶やカタナなどが報告されている。群馬県の高崎城下でニワトコを削って作ったとされる「大菊の花形」は、現在も見られる吊花型、開花型、段花型の削りかけのすがたを彷彿とさせるもので、その材も今と変わらずニワトコである。熊本の天草で「柳」の製と伝えられた「はるまんぢう」「花まんじう」と呼ばれた祝い棒の材にも変わりが無い。この熊本の「はるまんぢう」の、現在伝承されている祝い棒の名称と樹種を、試みに示してみたのが表 b である。I-二章で紹介した通り、ハルマンジュウの習俗は主に熊本県の沿岸部を中心に伝承がみられるが、その材をみると、カワヤナギやネコヤナギなど圧倒的にヤナギ類が多いことがわかる。このことは、「花嫁のしりを打」つことや「菓の木皮を打」つといった所作や「はるまんぢう」という祝い棒の名称のみならず、棒の材となる樹種も、習俗を形作る重要な要素のひとつであったこと、また、それが時代を越えて引き継がれていることを示している。

表a 近世史料に示された削りかけの樹種

地名	詳細	現在の伝承	文献
岩手県胆沢町	(十五日にしつる歳の祭り) 水木の枝に蜚玉(まゆだま)とて、玉なす餅を、つらぬき附て梁にたてり。 勝軍木 (かつのき)ノ菊ノ削花を幾英(ふさ)となく、某ノ木の枝ならん、それにひしひしととりさしたり (1786年)	胆沢町:ヌルデ (方名カヅの木)	1
秋田県五城目町	やはち米の 粉木 、あるは 柳 などして、菊(く)りのごとき花を削りなして柳の大枝のうれごとにして、鴨居、うつばりなどにおしたてり。これなん、妻戸(めどの)のけつり花にこそあらめ(1810年)ノ※米の粉木(ごめのこぎ)ミツバウツギか?	(秋田市: コシアブラ・ヤナギ)	1
秋田県秋田市	ほたき椿は、 柳 を三尺ばかりにし白くけづり、其さをけづりかけのやうにけづりて赤く染む。自然男根の形にも似かよひたり(文化年間)		2
	ほいたけ椿(ぼう)の窟(づ) … 柳 (やなぎ)をけづりかけて かくのごとくに制(つくる) 長さおよそ曲尺(かゝねさし)三尺 あるひハ 一尺四五寸なるもあり 長短(ちやうたん)さだまらず(1815年)	秋田市: コシアブラ・ヤナギ	3
	柳 ニテ椿ヘタル ホフタギ椿ト唱フルヲ以テ女子ヲ見ルヤ男児ヲ産メテ突クラ祝トス(1898年)		4
福島県磐城郡	藩士の家にては、新に にわとこの 木を削りて、その削屑の縋(い)どの如くなるものを、杖の頭に残すを削掛といふて、戸口に置く(1892年)	なし	2
福島県福島市	削掛と云者を製し 七日に各戸の門及び出入口の鴨居への中央へ垂れおく 其製 柳 にて 小なるは長さ五六寸許 長きも老尺二三寸に過ぎす 之を木の左右より前後より削りよせ終りに柳の心を切り去りて 之を削り掛と称す(1889年)	なし	5
新潟県長岡市	祝木、又、ホダラ木と云、 構 (ぬるで)を以て長さ一尺六七寸にして、周りを削りかけに製り、是を男のわらははへ共、堤て上元の日未明の間に、家々の門戸を扣き、戸を開よ戸を開よ、寝たか子たかど囃子言ふ… 構 木の五六寸なるを削りかけにして、注連縄を取する址の戸口に鈎下、又、同木の二尺余りなるを二つに割、横さまに懸にて十二筋を付、門松を取し址に立置、念日の朝採捨る也。俗に一年十二月の象と云り(1756年)	(柏崎市北条:ヌルデ 能生町百川:ヌルデ)	6
	削懸の事 是も 勝軍木 も削、門戸に懸る。十四日にかけ廿日にはづし侍り。民間におほかた侍り。		2
新潟県上越市	祝木又はホダラ木という、 構 (ぬるで)木をもつて長さ老尺六寸にする。周りを削りかけにする(1806-1836年)	上越市:ヌルデ	7
(北越)	北越にて祝木(い)わいぎ)となづけ、いにしへより伝へて、今に造る杖なり、 勝軍木 (しやうぐんぼく)(また勝の木ともいふ)或いは 胡桃木 にて造り、春初 男児ある方へおくりつかはすを、餅花とともに一ツ所に掛け置き、小正月にいたりて、男児これを見たりて、新婦の腰を打まねびをして、子を孕まじなひとし、また祝とす…勝軍木と云は白膠(ぬるで)木のことぞ(1815年)	柏崎市へ青梅町: ヌルデノ糸魚川市・青梅町:クルミ	3
信、飛、三、等の国	信、飛、三、等の国においては、 漆膠木 (ぬるでの木)を以て、その長さ一尺二寸ばかりに切り、上下より削除(けずり)かけ、先の方に左巻形(ひだりまきのかた)、或いは柳(やなぎ)桜花(ざくら)のはな)の如きものを紙にして切粘(きり)のりして、松まつ)の煙(けぶり)をもつてこれを燻べ、その形 取除(とれ)くれば、その模様白く残る。これをなずけて御祝椿(おいはひぼう)といひ、新嫁の腰を打つ(「日次記事追加」1674～1687頃、③より引用)	――	3
群馬県高崎市	十四日 今日 陸奥 (にわとこ)を絲のごとくけづりかけ、或いは大菊の花形にして門戸に繁。又長さ六七尺にして敷所をけずりかけ、菊花を串にさせるごとくにして神棚 及 宅中にかく、是れをけずりかけとなづく(「閨里歳時記」1780年)	高崎市:ニフトコ	2
群馬県桐生市黒保根	十三日 夕刻より作花支度…手きね大小老組、はらみ箸三拾五ぜん、花の残木に わとこ を依二致し、大釜の向江差置、初午ニたく…花 者 御注連之通 献る、但、年徳尊神・蛭子大黒天・馬家神・式手宛、十六善神、数拾六、勝手荒神神棚、続花(1846年)	黒保根村:ニフトコ ・ミズギ・ヌルデ	8
茨城県水戸市	十四日 …門にけつりさげとて 松 或は 柳 の枝を切、ほそく何枚にもけつり、白髪のごとくして門上にかく(1764～1781?)	なし	9
茨城県三和町	…一月一四日・十五日に使う「かき花」「かき箸」を用意すること。かき箸は「兼箸」ともいひ、 ぬるで・うつぎ で作る」「十一日に作ったかき花を、松をはずした場所に一本ずつ立てる」(幕末)	三和町:ヌルデ	10
千葉県松戸市	十四日朝、御かざり取り、若餅付、前玉として木 江 江 差上げ、井 柳花 ・にはとこ花 右同断…	(鎌ヶ谷市:ニフトコ 市川市:ニフトコ・ヤナギ)	11

東京都世田谷区	十四日 庭とこの梢二面削り掛いたし、竹を式尺位二伐、細く割、竹老本ヲ先三ツ位ゾバニ割、 <u>にわとこ</u> の削り掛 五、六寸位二切、中より皮を削りかけ竹へさし、門松取候跡へ不残立ル。栗坊、桿棒といふ。桿棒か。但、年徳神 初 神々棚、持込江も上之	(新宿区・板橋区: ニワトコ)	12
東京都(江戸)	安永・天明此迄、正月三日此より、 <u>柳</u> は柳よと云ふて売り来るを求めて、手前にて削り下げたるもの也。…其柳を買そこなへば、 <u>飾松の枝</u> を以て削り下げたるもの、寛政の始より削り掛けに致し売来る故、直に其まき用ひ候様になり、彼柳の枝売り此時より止めり(1831年)		13
	削り掛 十四日の夕べ、貴賤とも家ごとに、 <u>柳の枝</u> をいろいろにけづりかけて門にさす也(1851年)	(足立区・葛飾区・江戸川区: ヤナギ)	14
	江戸にては、武家および市民ともに、削(けず)り掛(かけ)と云ふ物を、今日のかゆをもつて諸門戸に垂る。 <u>柳の木</u> をもつて、これを制す…南畝(なんぼ)(号、蜀山人と号す。ここに二、三十年と云ふは、明和に当る)曰く、削り掛け、二、三十年前までは、門松を削り、あるひは柳をも削る。今は削る人なし(1853年)		15
静岡県(駿府)	十三日 村里今日を花盛日と称す。今宵 粥掻きは十五日の朝 粥をかくの用とし。削掛は十四日の朝 門戸にかくぐるを例とせり。其削掛は <u>陸莖</u> を以て造る形 尋常の如し、大小あり(1843年)	静岡市:ヌルデ	16
静岡県浜名郡雄略町	遠江国敷知郡神ヶ谷村、宇布見(うぶみ)村などにては、此日 十五日 小児の戯にダイノコといふものあり、 <u>松木</u> の四五寸廻 大なるは八九寸廻 なるを、長さ一尺余に切て、末より本へ削りかけたることけづりかけの如し(文化年間)	(浜松市:マツ)	2
愛知県三河国	けづりかけの事云々 あり。多くは <u>松の木</u> を以て作る。稀には <u>ニハトコ</u> の木にても作る。門入口などにかけおくなり(文化年間)	なし	2
和歌山県田辺市	直径一寸ぐぐりの太さの <u>シイ</u> や <u>カシ</u> の生木を二尺位の長さにして、皮をはいて刀のつばのようには削り掛けをつくり、子供たちはそれを腰に差して、女性を外に出てくれば、追いかけて行って尻を打つのである(田辺市/杉中浩一郎『熊野の民俗と歴史』清文堂出版1998年より引用)		17
	正月 十四五日の頃 子供ははらまつへといふ棒を作る 其棒大抵一尺四五寸許にして <u>若松</u> をきり手の握る所を残して皮を剥き ふすへて(ふすべ)で巻きたる筋の繪形などを付け 色紙をきり總(フサ)となし これを巻きて鐙の如になし 此棒を以て道通る女を祝ふといひて發祝ひますといひて尻をたくなり(1839年)	なし	18
	十五日にはいはひそとて童部の <u>松</u> にてつくくれる杖もて女の出来れば、老たる幼きはいはず打つ。童部多く集れば此日は女の門を出るものなしといへり(1861年)		19
広島県広島市	藩士の家には有之、農家には <u>門松</u> にて仕候も有之。又山入の時、一尺計に木をきり、皮を五つに削りかけ候も有之候へ共、稀なるかたに御座候(文化年間)	なし	2
広島県深津郡	削掛の事 <u>門松</u> の木の中にて、梳数十二月或は八節、廿四氣、卅二の申で、削掛仕、年中除夜を申事にて御座候(文化年間)	なし	2
広島県品治郡	けづりかけの事 在中にては <u>松の木</u> を割木とし、是を削りかけ、火を改て雑煮を炊き申候。又豆粒をそへ炊き申者も御座候。けづりかけ仕候者、多は無御座候(文化年間)	なし	2
熊本県天草市	けづりかけの事 なし。はるまんぢうとて、 <u>柳木</u> を一尺余り伐り、皮をさり、両木口よりけづりかけ、中程けづりため、中程けづりため、それを持て、子供花嫁のしりを打也。打せざる時は、家の壁を崩しなどして、正月十四日のゆふべ打也。又是を持て菓の木の皮を打也。かぐすれば災のといひて云へてする也(文化年間)	カフヤナギ・ (ネムノキ・ カシワ・ カシ)	2
	十四日には花まんじうと唱え、 <u>柳</u> の小枝を一丈程に伐り中程を花の様にかけ、神棚へ供え、十二、三以下の男子共は右を薪程に造り 花嫁の尻を打ち唱え事を申して相祝ひ(慶応年間)		20
鹿児島県鹿児島市	十四日…ケズリカケ〔割注 <u>堀(か)</u> の皮をむいて二尺位にけづりかけた物、関ヶ原戦の折 味方の目標として用ひられたことに始まり、後來記念の為に使用せられたものである〕と柳の枝、大の兒シヨイシヨイを門にさし床の間等へも供へた	イヌビワ・ ネコヤナギほか	21
その他	…街道郷村の兒童、年、十五 十八九以上に及ぶ者、各々 <u>柳の枝</u> を取り皮を去り、木刀を彫(きざ)み成し、皮をもつて又外、刀上にまとひ、火を用て焼黒め、皮を去り、以って黒白(くくびやく)の花(もよう)を分かつ。なづけて荷花蘭密(こばらみ・子孕み)という。再び菊蘭密(けいけい・いばら)の条(えだ)を挿しはさみ、香火(こうか)神前に供じ、次に集まれる各兒童、手に木刀をととり、途に隊囀(たいしゅう)し、すべて婦有りて久し子無きの婦、木刀をもちて遍身これ打ち、口に荷花蘭密(こばらみ)と念(とな)ふれば、必ずこの婦人をして当年孕むありて男の子を産む(1592年、③より引用)		3

【引用文献】(1) 菅江真澄全集1『菅江真澄全集』未来社(2) 平山敏治郎・竹内利美・原田伴彦編『諸国風俗問答』関里歳時記(3) 山東京伝1976『骨董集』日本随筆大成』第1期15 吉川弘文館(4) 橋本宗彦編1898『秋田沿革史大成』下巻 秋田株式会社(5) 福島市史編纂委員会1980『福島の民俗Ⅱ』(6) 今泉省三・真水淳 編1980『越後名産』越後義書16『野島出版』(7) 中沢肇編1985『鮎井雄記』越後府中雄記』雄文堂書店(8) 板橋春夫1993『上州水沼村星野家にみる近世後期の歳時習俗』群馬歴史民俗14』(9) 秋山房三1983『水戸歳時記』論書房(10) 三和町史 民俗編』(11) 谷川編1981『下総松戸大谷口村大熊家年中家礼日記行事』日本庶民生活史料集成23』三 一書房(12) 増田昭子2001『雑穀の社会史』吉川弘文館(13) 山田桂翁 1982『宝暦現来集』続日本随筆大成』別巻 吉川弘文館(14) 曲亭馬琴編・藍亭青藍 補2000『増補 俳諧歳時記』上巻 岩波文庫(15) 喜田川守貞2001『近世風俗志(守貞謄稿4)』岩波書店(16) 阿部正信1977『駿国雑志4』吉見書店(17) 杉中浩一郎1998『熊野の民俗と歴史』清文堂出版(18) 片岡英三1990『紀伊續風土記』第一輯(復刻版) 臨川書店(19) 紀南文化財研究会1993『伊達千広文集』(20) 天草町郷土誌編集委員会1978『天草町郷土誌』(21) 鹿児島市教育会1937『薩摩年中行事』

このように選ばれる樹種が変わらなかったのは、その用途が儀礼のためであったことと関係しているとも言える。新年の豊作や労働の無事、子孫繁栄など、縁起を担ぐ機会だけに、できるだけ間違いのないようにこれを行なおうとする心意が働くと考えられるからである。これに関連して、『民具マンスリー』誌上の座談会「民具における木の利用」では、滝沢秀一が「年中行事などの信仰とか儀礼的に使う木」は、人々が「できるだけ、昔から変わらずに使おうとする」ことを指摘している。またこれを受けて中村ひろ子は「まわりの植生が変わってしまっても、そのために一本だけ必要な木を植えておくという例もみられます」と述べている〔滝沢秀一ほか 一九八五 二三〕。いずれにしろ、時代を超えた史資料の対照によって、少なくとも近世からの数百年は、多くの土地で削りかけの材として同じ樹種を選び続けてきたことがわかるのである。

(3) 樹木文化とその広がり

ここまでみてきたように、削りかけに用いられる樹種群は明確に選ばれている。これまで削りかけの素材に対する認識としては、それが白くて柔らかい木であるという程度のものであり、とくに柳田以後は特別な関心のもとに追究されることはなかったと言ってよい。あるいは「素材となる木はある意味ではなんでもよくて、削り掛ける形状そのものが重要」なのではないかという見解もあり〔大塚 二〇〇二 七二～七三〕、そこに大きな意味は見出されてこなかった。しかし本章で確認したような、地域に広がる高い樹種の共通性は、人々が素材となる木が「なんでもよい」とは決して考えていなかったことを物語っている。その厳密性は、明らかにそれらの木が選び採られていることを示すものである。人々が削りかけに用いる材に注意を払い、それを選択しているという事実は、第一に、樹木という視点で削りかけを論じることの有効性を担保する。また、人々の選択の意思を支える慣習、観念の体系を樹木文化と呼ぶならば、削りかけをめぐる樹種選択を通して、そこにひとつの樹木文化の様相が顕わにされているといってよい。そうした樹木文化のなかに顕われるものとして削りかけも捉えなおす必要があるだろう。

表b 「ハルマンジュウ」とその樹種

地名	棒の名称	樹種 和名(方名)	削 り	用途			文 献
				供 物	嫁 叩	成 木	
有明町	楠甫	なれなれ木	ネコヤナギ	○	✓	✓	①
	須子	ナレナレ木	—	○		✓	①②
	下津浦	花まんじゅう・ ナレナレギ	ネコヤナギ	○		✓	①
倉岳町	宮田	春マンジュ	<柳>	○	✓		③
五和町	手野	(嫁叩き)	カワヤナギ	—		✓	②
	西方	花まんじゅう	<柳>	○		✓	③
	御領 (小串)	なれ木	主に<柳>	○		✓	④
苓北町	坂瀬川	花まんじゅう 人形※	<柏木>	※	✓		③⑤
	釜	花まんじゅう	<柳>	○		✓	③
本渡市	志柿町	花ん棒	ネコヤナギ	○	✓		⑥
		なれん棒	ネコヤナギ	○	✓	✓	
	楠浦町	花饅頭	<柳>	?	✓	✓	⑦
	戸宇土町	(成木)	カワヤナギ	○		✓	②
	長野	花まんじゅう	<柳>	○		✓	③
	豆木場	花まんじゅう	<柳>	○		✓	③
龍ヶ岳町	大道	(嫁叩き)	<榎>	○	✓		②
御所浦町	御所浦	(嫁叩き)	<榎>	○	✓		②
天草町	高浜ほか	はるまんじゅう	カワヤナギ ネムノキ	○	✓		②
	大江	ハナマンジュウ	カワヤナギ	○	✓		②⑧
	唐崎	花まんじゅう	<柏><柳> または<榎>	○	✓		③
河浦町	富津	モウグラ	—	○	✓		②
新和町	越池	花まんじゅう	<柳>	○		✓	③
牛深市	牛深町 (鬼塚)	花まんじゅう	<柳>	○	✓		③
牛深市	魚貫町	ハルマンジュ	カワヤナギ	—	✓		②
	魚貫町 (福津)	花まんじゅう	<柳>	○		✓	③
	久玉町	花まんじゅう	<柳>	○	✓		⑤
芦北町	(字不明)	しりうち	<柳>	?	✓		⑨
津奈木町	(字不明)	尻打ち	<柳>	?	✓		⑩
水俣市	(字不明)	(嫁叩き)	ネコヤナギ	?	✓		⑪

【引用文献】

- ①有明町史編集室2000『有明町史』
 ②濱田隆一1932『天草島民俗誌』郷土研究社
 ③熊本商科短期大学民俗学研究会1976
 『天草』下島
 ④五和町小串老人クラブ蘇友会1996
 『ふるさと小串』
 ⑤山下陽一2003「小正月の行事」
 『あまくさの民俗と伝承13』
 天草の民俗と伝承の会
 ⑥ふるさと誌志柿編集委員会1991
 『ふるさと誌 志柿』
 ⑦田中良則1998「農村の伝承行事の今昔」『あまく
 さの民俗と伝承II』天草の民俗と伝承の会
 ⑧天草町郷土誌編集委員会1978『天草町郷土誌』
 ⑨芦北町史編集委員会1977『芦北町誌』
 ⑩津奈木町誌編集委員会1993『津奈木町誌』
 ⑪水俣市史編さん委員会1997
 『新水俣市史 民俗人物編』

さらには、削りかけをめぐって表出する樹木文化は、諸外国の削りかけとの比較研究の際の具体的指標のひとつになるのではないか。なぜなら、同じく削りかけ状の造形物を重要な祭具とするアイヌの人々の間にも、樹種に対する強いこだわりが見られるからである。北海道アイヌを例に挙げれば、善神（人間に利益をもたらす神）に供える際にはミズキ、ヤナギ類、キハダ、ハンノキ類、ハシドイなどを用いたといい、なかでもミズキ、ヤナギ類、キハダは「人間と神との間」の「仲介役的存在」としての「木幣の材料となる傾向が非常に強」かったという〔北海道開拓記念館 一九七五 八二～八八〕。要すれば、一般の祭祀で多用されたのはミズキ、ヤナギ類、キハダということになる。また知里真志保によれば「天国では、キワダは金で、ミズキは銀で、ハンノキは銅」の幣になると考えられており、特に敬意を表す場合にはキハダやミズキを用いるが「幣は普通ヤナギで作る」という²⁰〔知里 一九七六 五八〕。地域により、また用途により差異はあるが、少なくとも用いる樹木を選りわけていることはこれらの伝承により確かである。このことは、当然のことながら、アイヌの人々の間にも実用と観念に基づく樹木利用の体系があり、すなわち何らかの関係性が取り結ばれていたことを示している。アイヌのイナウと本州以南の削りかけとの比較研究は実質的にはこれまでほとんど行なわれてきていないといってよい状況にあるが、こうした樹木との関わりを視野に入れた比較検討も、今後は必要になってくるのではないだろうか。

¹ 表では削りかけを作る地域のみ取りあげた（ただし調査事例中、ほとんどの地域が該当する）。『小正月のつくりもの』五冊は、群馬県下に見られる「小正月のつくりもの」（県の無形文化財、後に国指定重要有形民俗文化財）を保存・継承していくため、一九八五～一九八九年にかけて関連習俗の調査を行ない、報告されたものである。ここで調査・報告されたツクリモノは、後に群馬県立歴史博物館から刊行された『上州の小正月ツクリモノ』に写真とともに多数収録されているため、両者を併用することで当地域における小正月の祭具の形態、名称、素材を豊富に比較することができる。

² たとえば、埼玉県東秩父村安戸ではニワツク（和名ニワトコ）の節と節の間を一六段カイタ（削った）ハナと呼ばれる削りかけを作るが、鶴川次作さん（昭和九年生まれ）によれば、ニワツクは大抵どこの家でも庭の畑の隅などに植えておき、側枝を落とすなどして適材になるよう「仕立てる」という。群馬県でも「屋敷の片隅や、屋敷に近い畑の隅に植えてハナ木とする例が群馬県の中央部から東上州にかけて広く見られた」といい〔阪本 一九九七 三五〕、ニワ

トコ利用圏の広い範囲においてそうした例がみられた。

- 3 事実、全国の収集資料を概観してもヌルデは生木に近い状態で削る傾向が強い。材は乾燥させればさせるほどよく縮れるが、性質の脆いヌルデは、乾燥させすぎると削り部分が切れやすくなってしまうためである（事例についてはII-2章一節（2）参照）。ふさやかな削りかけにしばしば使われるミズキやキブシ等にと比べると、ヌルデは材質が弱く、繊細な縮れを表現しにくいと考えられる。
- 4 東北地方でアワボといってすぐに連想されるのは、餅を木やタケにつけて粟の穂に似せたものである。こうした餅製と木製のアワボヒエボがどのように関連するのも追究すべきテーマではあるが、本論では樹木という観点から捉えるため、穂の部分が木製のアワボのみを対象とする。なお及川宏幸は宮城県下の餅と木製アワボの分布について「餅で作ったアワボは県央から県北西部に分布し、カツノキ等木製アワボヒエボは宮城県北の北上川流域とその周辺に見られ、分布域は重ならない」ことを指摘している〔及川 二〇〇四 六四〕。
- 5 この地域では春彼岸にもケズリバナを作るが、春彼岸のハナは専用の鉤型刃物を用い、細かく縮れるように作るのに対し、小正月のハナは花卉がその倍以上の太さ、厚さになるように削るため、印象は全く異なる。材は同じヌルデである。なお、常用のナタで押して削るよりも、専用刃物で手前に引くほうが技術的には簡単だという。
- 6 たとえば事例③でもあげた東和町（現登米市）の別の地区（入沢）では次のような報告がある。「カツノ木（ぬるで）」で「削り掛けを作って花にみたてたものを十二個（閏年は十三個）を枯葉のついている栗の枝にさして庭に立てる。もう一方には、カツノ木の皮を剥いだものを粟、稗の実とし、皮つきのものをつみにみたててそれぞれ五個ずつ割り竹の先に挿して立てる。そして栗の枝と割り竹にしめ縄を張り、瓢箪を吊るし、篠竹三本を三又に立てる…（後略）」〔東和町史編纂委員会 一九八七 一〇八一〕
- 7 「クルミ」はどの報告も学名の記載がなく不明。「竹」についても学名はほとんど記載がないが、割竹の利用が篠竹、笹竹を大きく上回っており、造形的には枝葉のついた竹よりも一本棒の竹の利用が多い。「ヌルデ」は、当地でカツノキ、カズノキ、カツヌキなどと呼ばれる樹木に比定される。渡邊三四一は『日本植物方言集成』の分析から、ヌルデの「中部以北の東日本だけに集中的分布をみせる方言群」の代表的なものとしてカツノキ系の呼称を挙げ、その分布域が「関東甲信越から東北地方に及んでいる」ことを指摘した〔渡邊 二〇〇七 一七〕。またヌルデは小正月のモノヅクリにも最も高い頻度で登場する樹であることから、報告書等に特に記載のないものについても、カツノキ系名称＝ヌルデと採った。また資料には「梶の木」という表記も数例見られるが、クワ科のカジノキは、分布が本州の中部以西とされているため〔平井 一九九六〕、やはりカチノキ・カツノキ系名称のバリエーションと思われるも、未確認。
- 8 たとえば、花泉町（現一関市）の旧金沢村では「カチノ木」（和名ヌルデと思われる）で作った実や花をクリやタケに成らす。当地ではこれを「ものまね」と呼んでおり、総称としてのアワボ名称は報告されていないが、意味としては稲・稗・粟の実った様をまねたものと認識されている〔金沢村教育委員会 一九五六 二二六〕。
- 9 A以南のアワボ系名称地帯では、キンコ・キンコマンコ（岩手県南部を中心）、また行事名としてのものまね・田植（岩手・宮城の県境付近を中心）などの呼称が散見される。
- 10 なお及川も指摘するとおり、アワボの単独名称はあってもヒエボの単独名称がないことは注目すべき点である。
- 11 ここで対象とするのは「アワボ」「アワのボ」などアワを意味する名称を持った木製品とする。いわゆるアワボ風の造形でも名称がアワボでなかったり、アワボという名称でも形態が他と異なったりと、このツクリモノの境界は定まらない。よって比較的把握しやすい名称をひとつの基準に設定した。
- 12 比較的まとまったものとしてクルミ、クリ、ヤナギ類、ウツギ、タラノキなどが挙げられるほかは、キブシ、ミズキ、コウゾ、マツ、ナラ、キリ等が数例ずつ報告されている程度である。

- ¹³ 本研究における「削りかけ」の定義に則り、図5ではツクリモノに削りの施されたもの（カタナの鐔の部分が削りかけてあるものや、粥かき棒にわずかな削りが入っているもの等）も区別せずに収集し、その素材を数値に換算してある。それは峻別が困難なためであり、たとえばいわゆるハナのような削りかけ然とした造形物と、粥かき棒のようなツクリモノ然とした造形物との間に、線引き不可能な造形物が無数にあるからである。とくにヌルデはこうしたツクリモノ系の削りかけの材として多用されるため、数値が跳ね上がったものと思われる。なお今回は取りあげなかったが、とくに中部地方で多く見られるダイノコ名称（地域によってはダイコンとも呼ばれる）の造形物の材も圧倒的にヌルデが多く、ヌルデは概して小正月の特定の木製祭具と結びつきやすい傾向にあるといえるだろう。
- ¹⁴ ヤナギ科の木は種が明記されていないものも多いが、わかっている範囲ではネコヤナギとカワヤナギが多い。
- ¹⁵ 鹿児島県南種子町平山（種子島）の向井睦雄さん（大正一四年生まれ）によれば島で「タブ」と呼ばれる木には二種類あり、ひとつはイヌビワで、もう一種は大木にもなるということなので学名タブノキのことと思われる。イヌビワについては同定も行なった。また『日本植物方言集成』（八坂書房 二〇〇一）には、イヌビワの方名として南九州を中心にタビ・タビカズラ・タブ、イタビ・イタブ、イヌタブ、カワタブ・カワタビ、ヤマタビ等の名称が採録されている（Ⅱ－五章も参照）。
- ¹⁶ また、コメゴメの地域名称を持つ木は東日本での報告が比較的多いが、地域によってキブシやミツバウツギ、ムラサキシキブなどを指すとされるため特定できなかった。
- ¹⁷ 福島の『磐城誌料歳時民俗記』では、表の一文に続けて「按ずるに 享保三年印本の年中故事要言に、美濃国泳宮村に削掛けのことあり…安藤家藩士はみな美濃より移りたるゆえ、此等の事も此に移りたるものか」とあり、『備後国福山領風俗問状答』にも「藩士の家には有之」とあるから、これらは民間ではあまり行なわれていなかったと採るべきかもしれない。
- ¹⁸ 『備後国福山領風俗問状答』には「農家には門松にて仕候も有之」とあるものの、冒頭には「藩士の家には有之」とあるから、どちらかといえば削りかけ自体が武家の慣行であったことがわかる。また、水戸の場合は「松 或は柳」で削るとあるが、『常盤国水戸領風俗問状答』（文化年間）によれば「けつり下」は「農商には行はさるも有」とあるから、これもやはり武家などによって担われた城下町での習俗であったことがわかる。
- ¹⁹ たとえば横手市ではホタキ棒を「ボンデンコ」と呼んで専門の職人が製作に当たっていたが、一九五四年の報告には「柳で作ってゐたのが、柳の不足から金漆木（こしあぶらのき）、楮等で作」るようになったとある〔佐川 一九五四 二八〕。また、東北地方では削りかけを専門に製作・販売する地域においてしばしばコシアブラが用材として選択されていることも思いあわせてよい。東北で専門的に製作される削りかけといえば、春彼岸にお墓などにお供えする削り花がすぐに浮かぶが、たとえば山形県米沢市の笹野で一刀彫の職人が専門に手がけるヒガンバナも、山形県長井市森や宮城県仙台市近郊において農閑期の副業として作られ周辺地域に売られていたケズリバナなども、やはりコシアブラの製であった（Ⅰ－三章参照）。ここでコシアブラが特に選ばれる理由としては、第一にこの木がほかの用途にあまり供されない木であり、しかも里の近くで手にはいりやすい木だということが挙げられるが、柔らかく削りやすいこと、木肌が白いなどの性質も、不可欠な要素であろう。
- ²⁰ なお鳥居龍蔵は千島アイヌのイナウについて「用材は厳しく柳樹に限られていて、他の木は一切禁じられている」と述べている〔鳥居 五 一九七六 四四七〕。